

こども 教育 文化

第14号

もくじ

| | |
|-----------------------|----------|
| 宮城の教育遺産 14 「カマラード」の歩み | 1 |
| 教育のついで レポート | |
| みんなが活躍できるキンボール | 純：12 |
| 2年生と「名前をみてちょうだい」を読む | 中地 |
| | 千葉 政典：16 |

「カマラード」の歩み

宮城の教育遺産 14

「カマラード」という小さい雑誌があった。「カマラード」はエスペラント語で仲間の意。



第4次カマラード 創刊号

育に集う仲間をつなぐためのものであった。

この「カマラード」は、これまで、生まれては消え生まれては消えを4度繰り返した。戦後引き継いだ2度目のものを「第2期カマラード」と呼び、3度目のものは「第3次カマラード」、そして4度目の生まれかわりを「第4次カマラード」とよんだ。その4度の「カマラード」についてその時々の作り手の想いを追ってみたいと思う。

I、第1期カマラード（1937年）

カマラードの言葉 佐々木 正

過ぎ去れば、二度とはかえらぬ一日です。さわがしい・おちつけぬ今日のごろ、私どもは、何を考え、何をしているでしょうか。過ぎゆけば、ふたたびはもどつてこないこの一日を、もっと大事にいたわって、精いっぱい暮らしたくはありませんか。悔いのない、良心がまんぞくする、今日の眠りをほしいとは思いませんか。

ほんとの仕事を俺はしているぞ、あの劣兒だつて俺は愛しているぞ、俺はへばらぬぞ。俺の生活は確かだ。俺は、俺の仕事のために、元氣だぞ。俺には明日がある。明日があるという信念に燃えている。ああ、誰か、こんな叫びをあげてはいませんか。語る友をも失つて、ひとり道を歩いている人はいませんか。その人は、ここでうんと語つてく

第1期カマラードは、1937年5月に創刊号が出たが、9月に第4号が発行されて以降、5号は姿を見せることがなかった。編集者は佐々木正。この年の5月には、城戸幡太郎らによつて「教育科学研究会が結成される一方、文部省編集の『国体の本義』も発刊された。7月には「日中戦争」が始まり、8月には「国民精神総動員実施要項」が決定。

次の「カマラードの言葉」は、創刊号の冒頭にある編集者の言葉であり、「カマラードへ」はそれにつづく文。

ださい。うんと生活を見せてください。心ならずもまわりのザツな生活の波に流され、ほんものでない仕事に、一日をすりへらすあなたの仲間がわたくしだ。わたくしは、あなたの仕事で、わたくしの道を見つけたし、あなたの元気でわたくしも歩み出す。

わたくしが前に出るかも知れぬ。その時、あなたはわたくしを呼べ。わたくしはあなたをなぐさめ力をつけよう。ひとりひとりの仕事と生活を語り、ひとりひとりの生活と仕事を高め、仲間がいるという安心で一日一日を歩こう。つよい生涯だ。りっぱな暮らしだ。

この小さいカマラードは、そのための手びきに、そのための交流に、高い使命を果たそう。

嘆け、誇れ、怒れ、微笑め。わたくしどもは生活をなげないために、ここで語ろう。

カマラードへ 鈴木 道太

昔の仲間も遠く去れば

また日頃顔あわせねば

知らぬ昔とかわりなきはかなさよ

(国民歌謡 むかしの仲間)

このカマラード創刊の言葉に載った歌のひとふしに、何かしら熱い心になったものは僕だけであろうか。

あの頃は愉しかった。あの頃、上ずったように喋り合った。あの頃の顔はかがやいていた。あの頃……。

そして今、僕は顔を上げて、校門からつづく、月光に濡れた石段を見る。

この丘の上の住宅に降るような蛙の声が響き合い、桜並木にかすかな風の気配。

不意打ちでこの山の小学校に移されてからもう二月が過ぎ、昔の仲

間と遠く距って、知らぬ昔とかわりなきはかなさ。

だから、カマラードのおとずれがどれだけ僕を熱い思いにしたか。カマラードよ。君もまた熱い心でそれをわかってくれるだろう。

だが、僕をこんなに涌きたたせたのは、昔の仲間と、懐旧のなさけにひたらせる、ただそのためだけであろうか。

勿論、勿論それだけではない。

僕たちは、沈潜のあとのその後の実践を出し合いたいのだ。

集団の厳しい隊伍のなかで、僕たちの今もっている教育精神に間違いがないか、逸脱や偏向やきたしてはいないか、この現実のなかで、何が真実なものであるか、それを、それを知りたいのだ。

そうではないか、カマラード、君よ。

僕たちの集団は、はじめて組織をした年から考えてみると、もうあしかけ八年になる。その間には、新しく加わった人、離れた人と、幾分の変遷はあったが、組織の中軸はいつも不動であった。

宮城県には、さまざまな教育集団、あるいは研究団体はあるにはある。しかしながら、僕たちの仲間ほどに、真実を愛し、ただその真実への思慕だけで結んだ友情の仲間があるだろうか。ころんでは起き、ころんでは起きしてあるきつづけた仲間があるだろうか。

そんなことは、勿論、自慢ではない。そして自慢などという感情はとうの昔に忘れてしまった僕たちであった。

最初の集まりから、一貫してきた研究の目標は、生活の教育であった。読み方、または綴り方教育は、いわば、身についた衣服の類であった。

研究の目標などという言葉は、的確を欠くかも知れない。僕たちはてんでの生活を、仲間の中に運んで、喋ったり、笑ったりしてきただけだから。

僕自身のことをいえば、僕は荒浜の海の匂いを持ってきた。金棒の



第一期カマラド 創刊号

台の上で日録を書いたり、松林の砂の上で童話をきかせたりした。そして太い自在鍵の下に集めた農夫たちに産業組合の講義をしたり、青年と農民劇をやったりした荒浜の、浜辺の生活を持ってきた。

それから較べると、吉田時代の第二回目の集りは、部落の組織にながらない「手旗」を持って集まっただけだ。

だから、二度目の集りで、僕たちのやったことは、「綴り方研究」であつたかもしれない。だが、これはひとり宮城県、だけではいい。僕たちが全国の隊伍に合流したとき、世はずさましい「綴り方研究時代」ではなかつたか。

そして僕は今、この尋常科しかない小さい小学校で、青年運動と児童自治会に全力をつくしている。

そして、カマラドよ。これはうまく成功しそうでさえあるのだ。自然発生的な人道主義的生活教育から、綴り方を間にはさんで、目々々々科学的な生活教育へ、僕がやつと歩きはじめて時、カマラドよ。君たちから召集されたのだ。

正、反、合、と、うまい言葉ではないか、僕たちの成長が、ぴったりこの言葉で言いつくしているんだから。

生活へ、生活へ、生活へ。

た歩きつづけるのだ。

愉快ではないか、カマラド、君よ。

時は五月、われらは若い、と僕は第二日曜会の召集書に書いたつた。あれから四年たつて、外は月光に木立の濡れているよい五月。

カマラドよ。元気で往こう。

次の文は、9月発行第4号、編集者のあとがき。第一期カマラドは、この号が終刊号となる。

年表によれば、11月「中井正一らの『世界文化』グループ検査」。「大本堂設置」、12月「天内原忠雄、言論活動を非難され東大を退職」、12月「山川均・加藤勲ら400人検査」など。

宛名のない手紙 佐々木 正

——君

元気ですか。ずいぶん長いあいだ沈黙をつづけていますね。ときには便りをくれませんか。

今日はカマラド第四号を送ります。これはもつとはやく出すはずでしたが、誰からも原稿がこなかつたのでダメでした。第一号にも書いたように原稿をたのんでやらなくても、月に一回は仲間にあてた便りを送つてくれるといいのですがね。このころは君だけでなくみんなどうしているのか、ちつとも便りがありません。このような時代には、自分自分の持ち場をまもつてコツコツとつとめることは、たいへんいいことだと思えますが、仲間呼びかけ、呼びかけられ、たがいにいげましあつて生きていくこともたいせつではないでしょうか。

このあいだ東京日々、一小学教師が自分も戦いにやってくれという投書をしているのを見ましたが、ここにも興奮している自分の持ち場をはなれようとする人間がいるなと思いました。林房雄のように、どうしても冷静ではいられないと告白している男もいますが、私た

ちはこの場合興奮のなかにまきこまれないで、冷静に自分の持ち場をまもって努力しようではありませんか。私の隣りの級の先生が11日に出征しました。その補欠やら何やらでいそがしい日を送っていますが、毎日の仕事にこのころははげみを感じてやっています。君もいそがしい日を送っているでしょうが、次号にはぜひ便りをください。

国分一太郎君の見舞金については、どうか御尽力ください。趣意書には10日までとありますが、今月の末日までで結構ですから。まだ書きたいことがあるのですが、今日はこれだけにします。元気で努めてください。(9月18日防空演習の日) 昭和12年9月19日発行

1937年9月4号でカマラードは休止になったが、鈴木道太の「北方教師の記録」によれば、「1940年11月20日朝、特高の家宅捜査、連行。独房で、佐々木正・石森門之助のいることも知る」とある。そして2年目の冬、「五十嵐が送られ、菅野が送られ、鎌田が入ってきた。鈴木と佐々木は起訴されて予審にまわり、石森は釈放され」とつく。

第2期カマラードは、
敗戦の翌年の1946年7月21
日、第一期を引き継いで創刊号を5
号としてスタートする。編集は遠藤典男。
その出発時のことを、宮崎典男は「教
師そのままでの道」のなかで、次のように
書いている。
「よく生きていた友よ」は、特
集「あの日から」の中の鈴木
道太の文。

II、第2期カマラード(1946年〜1949年)

「カマラード」復活 宮崎 典男

昭和二一年の四月から、わたしは岩沼小学校に勤務していた。自分の家にはいったのをはじめて。となりの駅までであるが汽車でかようなことはじめて。町の大きな学校であることもはじめて。年がいもなくとまどうことが多かった。先生たちはグループで畑をつくったり、日曜日の行商までプランにのぼせた。ときには「ちようせん」でうさをはらした。そんな日がつづいたところ……。

講堂で県の何かの会があった。わたしの教室は講堂をとりぬける場所にあった。初夏の西日が廊下にまだらにさしこんでいた。そのむこうからやや猫背のあの歩きかたがやってきた。やはりそうだった。おもわず、手をにぎった。

「おめえ、ここにいたのか」
目がわらっていた。「よく、死なねていた。」

その日は、のむ時間もなかった。あれこれと昔の仲間の話をした。消息のわかるのは両手の指にあまるほどもなかった。とにかく、生きている者は、生きてると声をだそうではないか、『カマラード』を復刊しようということになった。めんどろな話はまだりなかった。

鈴木道太は更紙と原紙をなんとかする。インクも。
宮崎典男は原稿をあつめ、原紙を切る。できたら送る。
送れば、しだいに仲間とのつながりはできるはずだ。

佐々木正さんのつくった『カマラード』をさがします。戦前教育運動の最後をかざる伝統をいかさねばならない。

できるだろうか。逡巡はなかった。まず一号ができねば。その夜から原稿の依頼をだし、二枚の原紙を切った。半分は、よその本などの

抜き書きだった。しかし、謄写版刷りとはいえず、当時は高価な更紙であった（仙花紙といわれた再生紙が普通）。よわい原紙の切れるのはこまった。インクも良質であるはずはない。つまり、きたなくてよみにくいものだった。それを、きれいによつたこよりでとじた（ぶきようなわたしはそれがよれない。協力者があつたのだから）。正さんにつづけて、復刊一号をNo.5にした（昭和二年七月二一日発行）。中心になったテーマは『あの日から』であった。「あの日ときいてすぐ頭にうかんでくるあの日、あなたの心のままのあの日」をもとめた。

よくぞ生きて来た、友よ 鈴木 道太

臆病だった。

卑怯だった。

しかも事件そのものを甘くみていた。

貴様の教育はヒューマニズムにあつたか、と言われれば、即座に「イエス」と答える。しかし、コンミニズムと聞かれたら、「ノウ」と言うより外はない。

それでいて、僕は結局は唯唯諾諾と特高の言うなりに書いてきた。山形も秋田もそう書いたと言われ、回ってくる手記にもそう書いてあつた。だが、根本は、「大したことがあるか」と、タカをくくつた根性の甘さにあつた。

編笠をかぶって裁判所へ往復する路上、僕は恥ずかしかった。仮に僕が一個の共産主義者で、その罪をいま問われているのならば、昂然と胸を張って歩けるに違いない。けれども、一步一步後退して、とうとう逃げ切れずに捕われ、心にもない手記を書き、何というコツケイな道化者だ。ピエロが歩いている。僕は恥で胸が熱くなるのだった。

かえりみてわが人間のいたらざる

この検束も故なきにあらざる

この悔いが三年をつきまとつた。

いよいよ下獄するときまつたとき・僕はカロツサの「幼年時代」を差し入れて読んだ。

「もしも世界中の林檎の樹がごとごとく枯死して、ここに極くみすぼらしい一粒の種子が残つたとしたら、人はこれをどう処分するだろうか。この種子を顕微鏡で検査して、その精密な記録を後世に残すべきであろうか。それとも、この種子を地中に蒔いて、一本の林檎の樹に成長するという希みはごく僅かしかないとしても、運を天に任せ地中に埋めるべきであろうか」と、カロツサは書いている。

僕には、後世に残すべき等身大の資料を奪われ、教壇に復帰する万一の希もない。男児の生涯を賭けた仕事を捨てて、さて、どうして生きたものだろう。僕は初めて泣いた。

暗い時代は終わった。野火のように雑草は焼き払われた。

若草はまだ芽を出さないが、地中に静かに春を待っている。

むかしの友よ、われわれは生きてきた。よくぞ生きてきた。友よ。

第2期カマラドは、1949年8月1日発行の20号で終刊となる。20号で終刊にするとはどこにも見当たらないが、「あとがき」のなかに「現実『つぎつぎ』つある社会的情勢は、われわれ『カマラド』に対しても新たな決意をせまるものである」という文が見られ、本文中に「カマラドは主張する」が載る。

1949年ほどな年だったのか。7月から8月にかけて下山事件・三鷹事件・松川事件が起きており、9月には、国家公務員法にもつき公務員の政治活動を制限する人事院規則が制定されている。

カマラードは主張する（20号）

—カマラードの基本的綱領の確立のために—

かの暗黒の時代をこえ、「カマラード」はここまで生きてきた。「カマラード」の二十号をかぞえる年月はそう安らかな時代ではなかった。たれもが真実をかたらなかった。世の教育学者や、教育実践家と称する人々はいち早くファッシズムの片棒をかつぎ、絶対主義のドレイトとなった。だれしもそれを疑わなかった。そして、人々は帝国主義的侵略戦争へと組織されていた。かかる暗黒と暴圧の時代において、ファッシズムの嵐に抗し、教育者の良心をまもり、人民のための教育と、ヒューマニズムの一線をまもりとおしたものは、「北方性教育運動」「生活綴方運動」「生活教育運動」などに結集された人々であった。そしてその組織の中に、われわれの「カマラード」があつたということには、われわれが、如何に大きくその歴史的意義を認めても誤りではない。

しかし、われわれは、「カマラード」の伝統を愛し、その歴史的意義を重んずるが故に、たえず自らを脱皮してすすまねばならない。徒らに過去を想い、郷愁のあまさに



第2期カマラード 創刊号

ひたり、感傷におぼれることは深くこれをいましめねばならない。今や、単なるヒューマニズムも進歩の旗とはなりえないし、児童中心主義もそれだけでは進歩の役割をにないえない。われらは、われらの祖国が現実におかれている歴史的地位を把握し、その発展する方向をみきわめ、われわれの教育の果たすべき役割を科学的に規定

すべきである。単なる観念は何物をも現実としない。ここに、われわれは「カマラード」の進歩の伝統をまもり、その歴史的任務を果たすべく次の主張をかかげ、広く志を同じくする人々と共に日本の民主化の徹底のために戦わんとするものである。

- 一、世界の平和をまもり、戦争を挑発するあらゆるものに反対する。
- 二、民族の自由と独立をまもり、売国的植民地化に対し徹底的に闘う。
- 三、ポツダム宣言をまもり、日本の民主化のために徹底的に闘う。
- 四、憲法に規定された基本的人権をまもり、その実現をはばむあらゆる勢力に対し徹底的に闘う。
- 五、農村の近代化をはばむすべての勢力と闘い、農民を民主的な勢力として組織する。
- 六、教員・労働者・婦人、児童生徒の基本的人権の確保と、それをはばむあらゆる勢力に対し徹底的に闘う。
- 七、教育の機会均等を徹底し、それをはばむすべての条件を根絶するために闘う。
- 八、真理を愛し、正義にくみし、理想に生きる大衆を育てよ。
- 九、現実を客観的に把握し、科学的に行動する大衆を育てよ。
- 一〇、実力のある、そして創造性の豊かな大衆を育てよ。
- 一一、教育の植民地化、学力低下をもたらすすべての勢力に対し徹底的に闘う。
- 一二、児童・及び大衆を欺瞞する営利主義的文化制度に対し徹底的に闘い、民主主義的、民族文化の普及、創造のために全力をつくす。
- 一三、教育理論、教育技術の創造を現場の組織的活動より発展せしめよ。
- 一四、児童、生徒、教師、父兄を一丸とした民主的勢力の結集。
- 一五、カマラードの伝統を生かせ。

現実を無視して教育は成立しない。観念だけでは一つのリングも

ごかない。世界の歴史は、いまいかなる段階に到達し、いかなる段階に進みつつあるか。その科学的な把握なくしては、教育の問題も把握されることがなく、教育の目標もつかまれない。したがって教育の技術も発展されない。「カマラード」がその伝統の進歩的意義を受けつぎ、明日の使命を果たすために、まず把握されねばならないものは、現実の歴史的な把握である。その現実の把握なくしてはヒューマンリズムも反動に転落する外はない。第二次世界大戦の傷痕いまだ消えやらずして、ファシズムの嵐は国の内外にみちている。「人民は戦争を欲しない」。戦争の災害を永久に排除する道は人民の基本的人權の確立と、人民の民主的な組織による以外にはない。われらの教育とは現実においてその組織をすすめ、拡大し、発展せしめる営みに外ならない。

ここに「カマラード」第二十号を発刊するに当たり、「カマラード」の栄光ある歴史と、その伝統の現実に向う任務の大なるを思い、その「主張」をかかげ、会員全員の大衆的討議により、「カマラード」の「基本綱領」の確立を期するものである。(一九四九年八月一日)。

20号発刊後の9月、県教育研究所だった編集者の宮崎典男は、辞表を出さなければならぬところに追い込まれた。著書「教師と道」で、その事実についている部分を次に書きぬく。宮崎と編集に関わるようになっていた佐藤九二もまた現場を去らなければならなかった。いわゆる全国を吹き荒れたレッドパージである。

悲壮な風景 宮崎 典男

くもはや、わたしのあゆんできた道の到達するところがどこにあるかは明白であった。「窄き門」をそこにみた。しかし、それをくぐることをちゆうちよすることは許されなかった。

わたしが、辞職願を教育研究所、所長事務取扱に提出したのは、昭

和二四年九月のある日であった。宮城県教育委員会教育次長でもあった高山政雄は白晳の顔面の表情をうごかすこともなくわたしにいった。「県教委の下部機関である県教育研究所の所員が教育委員の非行を公然と告発する。」とは許せないという一点であった。わたしは、わたしにかかわることが、累を『カマラード』の会員におよぼすことがあつてはならないことを要望した。

高山氏は、それをとうぜんであると承認した。研究所の朝は、そのころ、とみに冷気を感じさせていた。高山氏との直接の話しあいわたしにとつて最初であったが、これが最後であることもわたしは感じていた。

幾月かたつて辞令を手にした。(中略) 一月一日には仙台市立連坊小路小学校講師の職も解かれた。わたしは、完全に教育公務員としての地位をはなれた。台風のすぎた地上に、泥にまみれた果実がごろりとひとつよこたわつている。それがわたしであった。この風景は予想できないものでなかった。

宮教組の執行部はまったくかわつた。書記長狩野兼雄、書記次長菅井一男、教文部長堀野孝司等々みなやめた。佐藤九二のやめた痛手は『カマラード』にとつて致命的であった。研究所でいっしょであった須永皎もやめた。県内でのパージは三十数名に達したと記憶している。まさに「悲壮な風景」であった。



第2期カマラード 最終号



第3次カマラード 創刊号

Ⅲ、第3次カマラード（1959年～1961年） 第3次カマラードについて 芳賀 直義

「宮城教育懇話会」の機関誌として、第3次「カマラード」が、芳賀直義・佐久間可次の編集でつくられるようになった。
第1号に、第3次出発の意を芳賀が以下のよう
に書いている。
教職員組合の教文部長だった芳賀を中心にして「実践検討会方式」を確立したことと重なるので、第3次「カマラード」の内容は教育実践が主になっていく。それを示すため、No.7の目次をそのまま示す。

これが「宮城教育懇話会」の機関誌第1号です。
カマラードという誌名にしました。どんな人がどのような感じを受けとってくださるでしょうか。
戦前のことでした。
いまも現場にいる佐々木正さんや、亡くなった石森さん、現場にはいないが、いつでもなかまの道太さんたちが、息づまるようなあのころ、ついに月1回の集まりさ

え持てなくなりました。その時つくられたのが「カマラード」だったのでした。編集は佐々木正さん。
そして敗戦をむかえました。
ほんものの教育をしたくてもできないでいた教師たちは、せきを切ったように、ほんものをとめあいました。今までとはちがうんだと。
そこで生まれたのが「カマラード」でした。編集は当時の遠藤さん、今の宮崎典男さんでした。
これも出せなくなりました。今までとはちがうんだと思わせた、そのものの力によって。
3度目の正直ということがあります。
今また「カマラード」と名づけました。3代目というものは、健全な、日本人民の常識によれば、大事なものをなそうです。
宮城の民間教育運動史のシンボルを、ほこらかにかけて、じりじりと前進したいと願っているのです。

No.7 (1961.4月) もくじ

算数科学習指導案〈円の面積〉——柳川亨さんの授業の記録—— 柳川 亨

芸術部会から〈美術教育よ、いきかえれ〉 岩佐 慶治

カマラードNo.6菊池鮮さんの提案によせて 那須 静

① 私はこう思う 菅原 祐輔

② 教室の片すみから さとうともゆき

通信1 さくまよしじ 通信2 安藤 正一

共有財産として 泉 俊弥

本だな 芳賀 直義

あとがきにかえて 芳賀 直義

日々を生きぬくために 小泉 定光

別冊

自然部会報告 〈熱の学習をどう進めるか〉 分析

高橋金三郎 半沢 健

ぬれない自転車

菊池 鮮

民研・レポートについて

はがなおよし

「中学生の教室」を読んで (麥書房)

大原千栄郎

7号のあとがきを芳賀が書いているが、「自分は組合の専従から現場にもどることにした」「8号には菊池提案について自由な立場から自分も書きたい」「5月には総会をもちたい」「教師の広場」特集号を一部70円で泉教組から買って全会員に届ける」「会費を納めてほしい」などが内容になっている。

しかし、8号は発行されることはなく、第3次は閉じることになる。

第4次「カマラード」創

刊号は1984年1月に刊行された。

1979年、講座「日本の学力」(日本標準)

の16巻「教師」に載った「教育運動と教師の変革」がきっかけになったので発行まで5年の時間を要した。

発行は「宮城県民間教育研究団体連絡協議会」。スタート時は年一回発行という約束だったものを途中から2回にし、編集委員は各サークルからのメンバーで構成した。

次は、創刊号巻頭のむすびの部分と、事務局担当となった菅井仁の編集後記である。

IV、第4次カマラード (1984年〜2007年)

なぜ、いまカマラードを 春日 辰夫

〈前略〉官憲の厳しい弾圧があるわけでもない。教育雑誌だつて氾濫している。サークル機関誌だつてたくさん出ている。それなのに私たちは、いま「カマラード」をつくりたい。しかも誌名も、何の誌名か明確でないとと言われることを承知で「カマラード」にしたかった。「カマラード」に、宮城の民間教育研究運動の精神と、長い間関わってきた皆さんの先輩の想いを感ずるからだ。

いま、民間教育研究運動への私たちの意気ごみはどうだろう。そして、私たちの運動に結集しなければとする連帯の意識はどうだろう。それぞれのサークルのこれまででつくりあげた財産の上に安住し、運動への意気ごみも連帯の意識もうすくなつていると言えないか。

北方教育研究運動に懸命になった人たちは生活に苦しい時代の中でも、カツカツの生存権だけではだめだ、人間らしい文化的な生活を与えなければならぬ、子どもたちに芸術や科学にふれさせなければならぬと考えて教育創造に取り組んだのだが、そのような意気ごみと強い願いを私たちはしつかりともつていられるだろうか。

私たちは「につぼんご」や「わかるさんすう」が民間のすぐれた財産であるを知ると、それにとびつきはするが、それを越えようとはなかなかしないのではないか。民間の財産を使えば民主的な教師、進歩的实践家と思ひこんでいるむきはないか。〈中略〉

私たちは、よく教科書の問題を口にする。そして、それは多くの場合当たっているのだろう。だから「わかるさんすう」を使うというだけなら、教科書批判の資格はもはやないのではないか。

私たちがサークルに集う意味は何か。

私たちの仕事は一人の力では覆いきれないほど厳しい創造の仕事だからだ。また、語り合い・支え合わないと挫折しかねない息長い仕事でもあるからだ。その語り合い・支え合いの場として「カマラード」はあった。第四次の「カマラード」を出したいのは、そのためなのだ。「人に出会うことが人を決定する」と個人的経験を冒頭に述べたのも「カマラード」の中に「人との出会い」を期待したいからである。

この「カマラード」が、語り合い・支え合いの場として、たくさん人の心と仕事を結び、子どもの幸せのために、教育創造の刺激と宝庫になりつづけることを願うのである。

編集後記 菅井 仁

第四子は難産であった。産み出す苦しみとはこんなことを言うのだろう。一九八二年夏に機関誌発行の話が彷彿し、以来17ヶ月目にしての誕生である。名はまたにしても「カマラード」。これ以外には宮域民間教育研究の伝統を引き継ぐ名は考えられない。

伝統は、また、新しく塗りかえられていくものでもある。伝統によりかかり停滞することは、頹廢を決定づける。どんなことがあつても後退は許されない。教室の仕事にもそのことがいえよう。経験を積むことは大切であるが、そこにあぐらをかいたとき、子どもは育たない、教師も育たない。学校も変わらない。

六人の実践記録は、これをのりこえることで生まれた。そこに値打ちがある。きつく、つらい仕事ではあるが、新しい歩みを始めたときの喜びは大きい。この喜びがあるから、私たちの仕事が成立するのだろう。私たちは今、一人一人が貧欲になることが必要であろう。

それにしても多くの人々に支えられての発刊だった。不慣れな本づくりの仕事で何もかもが初めてづくし。多忙の中を原稿を寄せて下さった皆さんに感謝。そして何よりも出版を引き受けていただいたき

た出版”には、実質的には編集委員のやるべき仕事まで手をわずらわせてしまった。

新生カマラードは、いよいよ荒海に船を出した。これからは読者の皆さん一人一人の力を借りて二号にむけて歩まなくてはならない。ご批判・ご意見を心からお待ちする。

第4次カマラードは2007年8月の41号で「休刊」となる。40号の編集会議で決めており、3次までと違つて、休刊にふれる文言が40号にも散見される。

次第に読者が少なくなつてきて、財政的に発行継続が無理になつてきたことが「休刊」にせざるを得なかつた最大の理由と言えよう。それも「時代の波」ということになるのかもしれないと考えると、これまでとまったく違つ「時代」に退かざるを得なかつたとも言える。

無関係とは言え、2006年12月15日、愛国心を盛り込んだ「改正教育基本法」が成立していることは明記しておきたい。

次は、41号巻頭、吉田茂の「教師として生きる」のおすびの部分、そして春日の「第4次カマラード、思い出すことなご(下)」の「おわりに」の文である。

教師として生きる 吉田 茂

(前略) 私たちもまた、「ほんとうの仕事」を求め、「俺の仕事」は本当にこれでいいのだろうか、それを確かめずにはいられない。どのような時代であろうとも、権力はその思いまでも奪い取ることはできない。

教師としての「私」を捨てて改訂教育基本法の「公」に身も心も捧げることが求められる教育が始まろうとしているとき、先達の生き方は私たちに勇気と希望を与えてくれる。

確かに改定教育基本法によって私たちが求める教育の仕事は一段と

厳しい状況に置かれるだろうが、「ほんとうの仕事」を求める教師たちがいるかぎり、私たちの教育運動の歴史は後退をすることはない。私たちの目の前には、瞳を輝かせて未来を見つめる子どもたちがいる。子どもたちの幸せのために、そして未来の教師たちの礎を築くために、教師として「つよく」生きようではないか。思いを同じくする仲間とともに。

第4次カマラード、思い出すことなど 春日 辰夫

〔前略〕カマラードは、その時々私たちが何を考え、どんな仕事をしたかを文字にして残すこと、それを介して広く語り合うことを願ってつくられた。それが、いかほどの役割を果たしたろうか……。それは、私の語ることではあるまい。

ただ、編集に携わってきた者としての最大の反省と考えるのが、「カマラードに書くこと」がいつの間にか「特別なこと」に思われ、だれでも、自由に、何でも語り合える場でなくなってきたように思えることである。その結果、書き手と読み手もしだいにずれていったのではないか。それは、民教連に集う多くの仲間が互いに胸を開くことが少なくなっただけの表れではないかとも思う。

亡くなった宮崎典男はサークルで繰り返し「書け」と言った。「書く」といういろいろなことに気づいてくる」と言った。この宮崎の言葉に励まされて私は恥ずかしさに堪えて書きつづけた。書くことによつて、自分が見えるだけでなく、他も見えるようになった。子どもの文もそれまでより読めるようになったように思う。それまでになく読書にも励むようにもなった。書くことは決して楽ではないが、それが仕事にプラスになるならば自分をさらけだす辛さから身を引いてはならないと私は思いつづけた。

そのためにカマラードは多くの仲間のものとしてあり、門は開かれ

ていたはずだが、本当に自由に誰もがくぐれる門にしえなかったのは、ひとえに編集の工夫のなさだったのだろう。今になって言うのはあまりに遅すぎるが……。

「飛ぶ教室」(ケストナー作・山口四郎訳)の主人公フリッチェが次のようにどなっている。「教師たるものはな、つねに成長・変化する能力を持ちつづける義務と責任があるんだ。でなきゃあ、生徒は朝なんかベッドにねころがったまま、授業なんか蓄音機をかけて、レコードにしゃべらせたっていいんだ」と。

もしかすると、カマラードに萎えが見られるようになったのは、私たち個々の内にあるのかもしれない。

カマラードの誕生を喜んだ鈴木道太が「カマラードよ、元気で行こう」(3ページ)と書いて80年になり、第4次カマラードが休刊となって、まもなく10年になる。

時代は大きく変わって、紙で教師がつながる必要はなくなっているのだろうか。としても、よりよい仕事をするための模索はどんな時代であろうと期待されていることも間違いないと言えるだろう。



第4次カマラード 最終号

みんなが活躍できるキンボール

中地 純

1 題材設定の理由

これまでに見てきた高学年の児童たちの中には、ボール運動に対して苦手意識を持っている子が少なくなかった。特に、おとなしい子や女子の中にそのような児童が多く見られてきた。能力的にはもっと活躍できると思われるのに積極的にボールに向かつていけない、そんな子たちにボール運動の楽しさを味わわせたいというのが本題材を設定した一番の理由である。

2 キンボールの特性・ルール

キンボールは、ボール運動の中では変則的なネット型に分類されると理解している。バレーボールのようにサーブをして相手チームがそのボールを受けるゲームだが、ネットはなく、同時に3チームがプレーする。また、コート全体を3チームで使う。ゲーム中に全員がボールに触れなければならぬため、一人の活躍で勝つことは難しく、ボール運動が苦手な児童でもたくさんボ

ールに触ることができなのが特徴である。

3 指導の実際

蔵王町立平沢小学校5年生。男子7名、女子6名、合計13人の単学級である。事前のアンケートでは、A児「ボール運動はあまり好きではない」B児「体育が好きではない、失敗したときに責められる」と答えていて気になった。

この二人の児童に「ボール運動の楽しさ」を、他の児童には「みんなで協力することの楽しさ」を味わわせることを目標に指導を進めていった。

まず、毎時間のリードアップゲームでたくさんボールに触れさせ意欲を高めるようにした。直径110cmの大きなボールを前に、児童たちは驚き、触れることを楽しんでた。

次にルールを大まかに教え、サーブ・レシーブのやり方を確認しながらミニゲームを行っていた。このサーブ・レシーブが全員で行うものであったため、一人の力ではできないことを強調して説



〔キンボールのルール〕

■1ピリオドの競技時間は15分とし、休憩時間3分をはさみ3ピリオド行い、3ピリオドの総得点で競います。(※ただし、申し合わせ事項として、参加者の身体条件や年齢、経験の有無、1チームの登録人数が少ない場合などを考慮し各セツトを自由に設定できます。日本では現状7分または10分1ピリオドの試合を3試合行う場合が多い。)

1. ピンク、グレー、ブラックの3チームで競います。(各色のゼッケンを着用する。) 1チーム4人で、交代要員は各チーム8人まで。(計最大12人)
2. 3チームのキャプテンがじゃんけん(日本ルール)をし、勝ったチームがヒット(サーブ)権を得ます。
3. ヒット権を得たチームはコートの中央で(ゲ

明した。上記の児童二人も進んでボールに近づいていく姿が見られた。

その後、チーム分けを行い、みんなが活躍できるように作戦を考えて試合をしていった。まず守備の作戦を考えさせ、全員がレシーブ時にボールに向かつていけるようにした。うまく守るために四方に散り、まず一人でレシーブをしてそこに仲間が集まって捕球する。このような作戦を各チームが立て、前述の二人も自分のところに来たボールをしっかりと捕ろうとしていた。すぐにフォロウに向かう児童の姿も良く見られ、しっかりと協力しあつて活動していた。その後の攻め方の作戦もどこにサーブを打つかみんな考えたり、仲間同士でアドバイスし合ったりする姿が見られ、様々なうち方で攻める光景が良く見られた。

4 児童の姿

第1時

初めて見るキンボールの大きさにA児もB児も目を輝かせていた。この日は、リードアップゲームを行った後、サーブのセット方法を教えてみんなで順番にサーブをしていった。順番待ちの児童にはレシーブを行わせて、たくさんボールに触れるようにした。

第2時

4人ずつのチームを作り、セット状態からのサーブ、チームみんなで行うレシーブの方法を学習した。

また、どうやったら得点が入るのか教えて、簡易ルールで5分1セットのゲームを行った。まだ慣れていない状態で、A児もB児も積極的にはレシーブに行けてなかったが、友達のレシーブのフォロウをたくさん行っていた。

第3時

得点を入れる方法を確認し、改めて作ったチームで作戦を考えながら6分3セットのゲームを行った。

相手チームのメンバーがいなくて狙ってサーブを打つように考えて動いていた。守る側もすぐにレシーブできるように考えて動いていた。A児は作戦の都合もあり、レシーブで活躍する姿が見られるようになってきた。B児も自分からボールに触ろうとする姿が見られ始めた。

第4時

今回は、レシーブするためのポジションを考え守備重視の作戦を考えさせてゲームを行った。

チーム全員が散って、誰かがレシーブしたらすぐにフォロウに向かつて行き、どこに打たれてもとれるよう作戦を練るチーム。わざと空間を作って打たせ、全員でそこへ集まる作戦を立てたチームと工夫して活動していた。A児は仲間と立てた「一度上に打ち上げレシーブをして取る」という作戦を成功させて喜んでいた。B児が2回自分のほうに来たボールを止め、仲間の助けで無事レシーブを成功させた。その際にリーダーや仲間からほめられ、とても良い顔をしていた。さらに得

△開始時・ピリオド開始時のみ、ヒッター以外の3人がボールを支える。ほかの2チームはコート内すべてを守るように守備につきます。

4. 試合の開始はレフリーの合図(笛)により開始とします。

5. ヒットはヒットチームの1人が、必ず「オムニキン」と言い、続いて「レシーブチームの色」(自チーム以外のどちらか)を大きな声でコールしてからヒット(腰より上のみを使用し、手や腕などでボールを打撃)する。ヒットの瞬間は4人全員がボールに触れていなければならない。「オムニキン」は必ずしもヒッターが言う必要はない。

「オムニキン」と「色」は別々の人がコールしても良い。ただし、その都度必ず1人のみとする。

※「オムニキン」(OMNIKIN)は「すべて」という意味の英語 omnipresence と KIN を合わせた言葉です。

6. ヒットされたボールは指定された色のチーム(レシーブチーム)が床に落ちる前にレシーブ(全身使用可)します。

7. レシーブ成功後、自チーム以外のどちらかに同様にヒットします。

8. レシーブまたはヒットに失敗すると、失敗したチーム以外の2チームに1点ずつが加点されます。

9. その後のゲーム再開は、レシーブを失敗したチームが失敗したところから(2.5mの範囲内で)ヒットして再開。(反則した場合も同様)

10. ゲーム途中でもピリオド終了のタイムキープからの合図でピリオド終了。

11. 第2ピリオド、第3ピリオドスタート時は前

点も2点入れてみんなからほめられ、この日の感想で、初めて「楽しかった」と書いていた。

第5時

基本となる攻めと守りの学習をしたので、どのチームを狙って攻めるのかという観点で作戦を考えさせ、もつと高度なゲームをさせようとした。この日は、サーブの工夫もたくさん見られた。しゃがみこんで後ろに向かつてのサーブや、セットをすばやく行い、相手チームがポジション取りをする前に打つなど、これまで以上にスピーディーに動く姿が見られた。このころにはA児はボールに向かつて積極的に走ってレシーブに行くようになっていた。また、B児も疲れてもプレーする楽しさを取るようになっており、休憩をうながしたときにも「やる」と言って最後まで頑張った。この日は守備で何回も相手の得点を防ぐ活躍をした。

第6時

これまでのゲームでの工夫を振り返って勝つために作戦を考えてプレーさせた。守備重視のチーム、いろいろなサーブで攻めるチーム、すばやく動いてどこが空くか分からないようにするチームと見ていて面白いゲームとなった。A児は守備に力を入れた作戦でしつかりと守り、チームの初勝利に貢献して大いに喜んでいた。B児は、リーダーの指示を良く聞いて動き、仲間と一緒にチームとして動くことができ、「得点はできなかつたけどみんなと楽しくできて負けても良かった」と感想

に書いていた。

第7時

本来は全6時間の予定だったが、児童たちの希望を受け、もう1時間行うこととした。

前時と同様に自分たちで勝てるように作戦を考えてプレーした。児童たちは勝ち負けにこだわらず、みんなと一緒に攻め、守り、得点し、得点され、最終楽しんでプレーしていた。

最後の感想を書かせたときには、A児は、「ボール運動は苦手であまり触れなかつたけどキンボールで克服できて良かった」と書いていた。残念ながらB児は体調不良で欠席だった。

5 課題について

協力し合って全員が活躍でき、苦手な児童も楽しく活動できることが目標であった今回の実践では、当初の目標はおおむね達成できたと考えている。

課題として今考えているのは、この実践でボール運動を楽しいと思ふことができた児童に他のボール運動でも同じように楽しさを味わわせることである。フラッグフットボールなどルー尔的にみんなで協力してボールを運ぶことが必要な運動を通して、サッカーやバスケットボールでも進んでボールに向かつて行こうとする姿勢を育てていきたい。

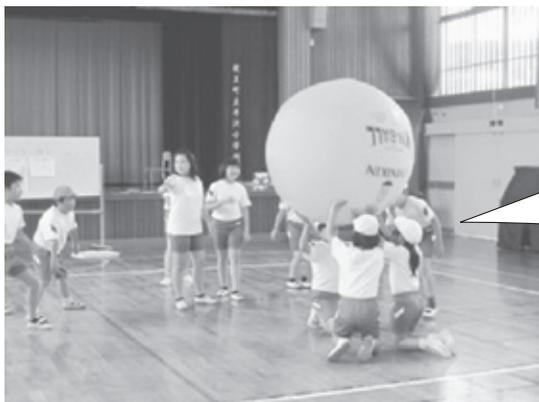
(刈田・平沢小学校)

のピリオドまでで最も得点の低いチームが、ヒット権を得る。同点の場合は日本ではじゃんけんで決める。

〈ルールと反則〉

- ・ヒットの瞬間には味方のメンバー全員がボールに触れていなければならない。
 - ・1人のプレーヤーが続けて2回ヒットできない。
 - ・ヒットは床と水平以上の角度で飛ばさなければならぬ。
 - ・ボールの直径の1.5倍、1.8倍以上飛ばさなければならぬ。
 - ・レフリーにも聞こえない小さなコールな場合は反則となる。
 - ・レシーブした後、ボールを持って走ることもチームメイトにパスすることもできるが、3人目がボールに触れたらその時点でボールに触れているプレーヤーとその後にはボールに触れたプレーヤーは軸足を動かしてはならない。
 - ・1人目がレシーブのためにボールに触れてから10秒以内に3人目がボールに触れなければならぬ。
 - ・レシーブするチームの3人目がボールに触れた後は、5秒以内にヒットしなければならない。
 - ・ボールを両腕で抱え込んで持つてはならない。
 - ・カバールの口の部分をつかんではいならない。
 - ・レシーブの瞬間、コートの外に両足が出てはならない。
- 右記反則を犯した場合、ほかの2チームに1点が与えられる。

(※日本キンボール連盟HPより引用)



サーブのシーン。しっかり3人で支えていて、奥の一人が打とうとしている。

素早く集まってレシーブしたところ。一人が触って時間を稼ぎ、その間にみんな集まった。ここからしゃがんでサーブの準備に入る。



レシーブをする側の写真。どこに飛んでもいいように散らばっている。



サーブの工夫。潜り込んで相手のいない方向に打とうとしている。右奥の青の子は仲間に指示を出して動いている。





2年生と「名前をみてちょうだい」を読む

千葉政典

この頃ずっと高学年担任が続き、15年ぶりの低学年。高学年では段落を意識させながら、やや理性的な読みをしてきたが、低学年は物語の世界に入り込み、登場人物に感情移入させたいと思い、場面を丁寧に行おうと思つて実践を行つてきた。

しかし、低学年の教材はいわゆる「ファンタジー」が多い。子どもたちは場面ごとに多様な読みをするために、場面の絵を描くのが難しいと感じている。例えば、帽子の名前が違つて見える場面では「本当にそう見えます。」と書かれているが、子どもたちは「えっちゃんの帽子なのに変わっているのは変だ」「名前は変わっていないけど、そう見えただけだ」「違う帽子なので、えっちゃんの帽子はどこに行ったのか」「帽子が何個も出てくる」……など、それぞれに読み取るので、「そうかもしれないね……」とまとめる。教師の読みに近づける気はないのだが、もつと共通のイメージを持たせたいと思つてしまふ。

そんな思いを持ちながら、今年の宮城民教連冬の学習会でレポート報告をした。その時に参加者から

出された意見を加えながら、実践報告をしたいと思ふ。

授業記録（1〜5） 本文

- ① えっちゃんは、お母さんに赤いすてきなぼうしをもらいました。
- ② 「うらを見てころん」
- ③ そう言われて、ぼうしのうらを見ると、青い糸で名前がししゅうしてあります。
- ④ 「う・め・だ・え・つ・こ。うふつ。ありがとう。」
- ⑤ えっちゃんは、ぼうしをぎゅうつとかぶりました。そして、さっそく、あそびに出かけることにしました。

T1. 1から5までです。一度読んでください。（各自黙読）

T2. それでは〇〇君読んでください（指名音読）

T3. だれのこと書いてある？（えっちゃん）

えっちゃんができてきましたね。誰に何をもらいましたか？

・お母さんに赤い帽子をもらいました
・素敵な帽子です
・ししゅうがしてある（それはまだわからないよ……）

T4. ぱつとぼうしを見た瞬間どう思ったんだらうね
・すてきたと思つた
見た目ですてきたと思つたんだよね書いてあるもんね

T5. どころがすてきたと思つたんだらうね
・リボンがついているところ
・赤い色
・全体に素敵だった
・形がいい
・さわりごこち
・麦わら帽子だから（ええっ！）
・においもよかつた

・サイズ（大きさ）がちょうどいい
・重さもいい（ふわつとしてるんじゃないの）
・材料がいい（布がフェルトみたいなのかな）
・お母さんの手作りの所（えっ！、わかんないじゃん）
T6. 手作りかどうかはわからないけど、そう思ったんだね。他にはある？
・おさがりだから、愛情がこもっている（えっ？）
おさがりって何？……）

*説明

・新しくきれいなところ

T7. とっても素敵だなと思ってこの帽子のことが……とても？
 ・好きになった・気に入った
 * 板書にまとめる

◆ えっちゃんが、ぼうしのことをとっても気に入ったということ、さらに「すてき」という言葉の本身を具体的にとらえさせたかったので、本文に書いてはいないのだが聞いてみた。子どもはいろいろと答えていたが、何の根拠もないので、自由に言い合うだけの活動になつてしまった。子どもたちなりにイメージしていたとは思ふのだが……。

T8. とても気に入ったみたいだね。でもね、それだけではないよ。お母さんに言われてうらを見たら何があったの？

・青い糸で名前が刺繍してあった
 ・自分の名前があった
 T9. えっちゃんの言い方は……？ 読んでみて（うめだえつこ）と区切って読む何人か指名して音読させる）

何でこんな言い方しているのかな？
 ・ひとつずつゆつくり読んでみる。
 ・確かめている
 ・ゆつくり読んでみる・自分の名前だつて思った
 T10. 「うふっ」は？
 ・うれしい
 ・喜んでる
 ・笑っているから喜んでる

T11. そつだね。だから帽子のことが？
 ・とっても気に入ったすこく喜んだ

・ますます好きになつた
 ・自分だけの帽子だつて思えたので、すこく嬉しかった
 ・大切にしたい
 T12. ししゅうつて時間かかるんだよね。お母さんはどんなことを考えながら、えっちゃんの名前を刺繍したと思う？

・この帽子のことを気に入ってくれるかなと思いつながら
 ・えっちゃんのことを考えながら（Tどんなこと？）喜んでる顔……
 ・大切にしてくれるかな
 ・えっちゃんのうれしい顔が見たいなあ
 ・楽しめるかな（Tどういうこと？）
 ・ありがとつて言ってくれるかな
 ・かぶるのを楽しみにしてくれるかな
 ・帽子を渡したら喜ぶかなあ
 ・えっちゃんがこれからも元気でいてくれればいいなあ
 ・この帽子のことずつと使ってくれればいいなあ
 ・えっちゃんの写真の笑顔の思いながら、名前を刺繍したと思う

学習会で話されたこと

このT12がみんなから指摘された発問であつた。
 「何故ここで視点をえっちゃんからお母さんに変える必要があつたのか！」
 私は、お母さんがどれだけえっちゃんのことを思つて、刺繍したのかを想像させることが、「えっちゃんの名前を大事に思う気持ちに繋がるのだから」と考えたが、視点をお母さんにしたことで、かえつて子どもたちを物語の世界から遠ざけてしまつた」と。

そのまま、子どもたちにはえっちゃんのお持ち（視点）で考えさせれば良かったのだ。
 「えっちゃんはその顔を見て、お母さんのどんな姿を想像しただろうね。」

低学年であるから、主人公と同化させ共感させるためにも、視点を変えずに物語を読み進めることが必要であつた。

それから、出された意見は、そもそもこれを聞いて想像させる意味があるのか……？というもの。書いていないことを読ませるのは必要なのではないか、この場面で読ませることは、えっちゃんがとても嬉しいのだと分かることだと言われた。そのことは本時の最後の「さつそく遊びに出かけることにしました」で書くことにしたい。

T13. そんなことを考えながら刺繍したんだろうね。お母さんがこんなえっちゃんの姿をみてどう思つただろう？（板書を指しながら）とても気に入つた（すこく喜んだ）

・気に入るとは思つていたけど本心にそうなつてうれしいなと思つている
 ・喜んでるのでよかつたと思つている
 ・気に入ってくれるか心配だつたから喜んでくれるうれし

◆ 本文に書かれていないが、えっちゃんの姿を見て喜んでるだろうお母さんの姿を想像させてみた。えっちゃんのことを考えながら丁寧に心を込めて刺繍しただろう。お母さん、気に入ってくれるだ

ろうか、きつと気に入ってくれるはずだ
 と思いつながら帽子を手渡したお母さん
 そんなお母さんの姿を考えることで、愛
 情がこもった帽子が2人にとつてとても
 大切であることが強調できるかと考えた。
 しかし、ここでも自分勝手な読み取りに
 なってしまったかと思えた。つまり、本
 文に描かれている場面をイメージしてい
 なくても、自分の経験から想像できる発
 問であったかもしれない……

T14. 二人とも喜んでるんだね

えっちゃん帽子をぎゅつとかぶっているね？
 どうして？

- ・うれしかったから ・気に入ったから
- ・大切にされたからぎゅつとかぶった
- ・そうすると暖かいから
- ・なくしてしまつたらお母さんが悲しむから
- ・風にとばされないように

* ここでチャイムが鳴つてしまう……

T15. 最後の文章です。「遊びに出かけることにしま
 した」って書いてあるね

「出かけました」と比べて、どう違う？
 少しグループで相談してみて……

- ・「出かけました」はもう出かけていて、「でかけ
 ることになりました」はまだ出かけてない
- ・「ことにしました」は決めたこと

T16. 「〜ことにする」って自分でそう決める時につ
 かうんだね

こうしようと思つて決めることには理由があると
 おもっただけど……
 どうして帽子をかぶつて遊びに行こうと思つたん

だろう？

* 少し周りの子同士で話し合いをする
 いろいろな考えを言い合う（1分間くらい）

（前時の）感想にくららさんが書いていました。
 「友達の方に持つて行きたかった」みんなはどう
 思いますか？
 それでは、今日の感想をノートに書いてください。

学習会で話されたこと

「ぎゅつとかぶりしました。そして、さつそ
 く遊びに出かけることにしました」の文章
 に、これまで書かれていた文章がすべて凝
 縮されているという意見が出された。嬉し
 さの気持ち「ぎゅつと」であり、「さつそ
 く」であり、「出かけることにしました」で
 あるという行為に表されていると。つまり、
 えっちゃんは赤い帽子をもらったからこそ、
 このように行動した。うれしくてたまらな
 い行動であると言われた。

確かに「ぎゅつと」には教室の子どもた
 ちも、大切にしたいとかうれしかったから
 とか答えている。ある程度えっちゃんの様
 子を描けていたかなと思つているのだが、
 出かけることにしたというもくるみ動詞を
 扱い、うれしくてたまらずに、誰かに見せ
 ずにはいられないという、えっちゃんの姿
 までは描けなかった。

授業記録9〜20 本文
 ⑨ えっちゃんが、その野原に走つていくと、

赤いぼうしをちよこんとかぶつたきつね
 が一ぴき、白いすきをもつて、プープー
 ふいていました。

⑩ 「それ、あたしのぼうしよ。」

⑪ きつねの頭をゆびさして、えっちゃんが
 言いました。すると、ふりむいたきつねは、
 すましてこたえました。

⑫ 「ぼくのだよ。」

⑬ 「あたしの名前が書いてあるわ。名前を
 見てちょうだい。」

⑭ きつねは、しぶしぶぼうしをぬいで、名
 前のところを見せました。

⑮ 「ほうら、ぼくの名前だよ。の・は・ら・
 こ・ん・き・ち。」

⑯ なるほど、きつねの言うとおりの。ほんと
 うにそう見えます。

⑰ 「へんねえ。」

⑱ えっちゃんがもう一度たしかめようとし
 たとき、強い風がふいてきて、いきなり
 ぼうしをさらつていきました。

⑲ 「こら、ぼうし、まてえ。」

⑳ えっちゃんときつねは走り出しました。
 ぼうしは、リボンをひらひらさせながら、
 こがね色のはたけの方へとんでいきます。

T1. 「その」が出てきたよ。その野原って（どんな
 野原なの）？

* 「こそあど」が付いている場合は、ちゃんと前に
 説明があることを以前の授業で確認しているので、
 ここでも軽く確認してから聞いている

・ぼうしがとんでいった野原
・えっちゃんがぼうしを追いかけて走っていった野原

T2. えっちゃんはずっと走っていったんだよね。どんな様子で走っていったんだっけ？

・大事な帽子なので一生懸命に走っていった
・絶対に取り返すぞと思ってるので真剣な顔をしている

・一生懸命に走ったから、もう追いつくと思ってるから安心して平気な顔になってる
T3. そこに誰がいたのですか？

・きつね
(どんな？)

・帽子をちよこんとかぶっていた

・赤い帽子をかぶっていた
・白いススキをプープー吹いていた

T4. えっちゃんは「それ、あたしの帽子よ」って言ったね。「それ」って何？

・赤い帽子
・きつねがちよこんとかぶっていた帽子

T5. えっちゃんは「あたしの帽子よ」って言ってるね。この言い方は……

自分の帽子だと言っている……
・間違いないと思ってる
・自信がある
・だつて帽子が飛んでいった畑に同じ帽子があったから、自分のだと思っ

たから、自分のだと思っ
・形も同じだから

T6. どうして自信があるの？

・えっちゃんはずっと見ていてそれを追いかけてきたから間違いない

・だつて色が同じだったから

・それにリボンも付いていたから



(*挿絵をみて言っ)

・飛んでいった場所と同じ所があったから(そんな偶然ないから)

T7. そしたら、きつねはすまして答えるよ、何て？
(「ほくのだよ」すまして、平気な顔してということだつたね)

・何もなみたみに言っている
・全然慌てていない感じ

・何だよって思っている。だつて自分のだと思っ
ているから……

T8. そう言われてしまったよ。でも、えっちゃんには自分のだときちんとわかる証拠があるよ

・あー、名前だ
・お母さんのししゅうがしてある
・青いししゅう

T9. だからこう言います。みんな「あたしの名前が書いてあるわ。名前を見てちょうだい。」

T10. きつねは「しぶしぶ」見せます。しぶしぶって？

・いやいやしている
・本当は見せたくないからいやなんだ

・面倒くさそうにしている
・本当にいやなのに、えっちゃんが言うから見
せた

◆「しぶしぶ」という言葉から、「見せたくないのにいやいや見せる」きつねの姿がイメージできれば、かぶっている帽子はきつねではなく、えっちゃんのだと子どもたちは思っただろうが、ここできつねの行動をしつかりイメージさせられなかつたため、この帽子はきつねのだと思っ子がでてきたのだらう。

どうして、見せたくないのかを考えさせるべきだった。面倒くさいからと答えた子は、「きつねのなのに」と思っていたかもしれない……。

T11. 何て書いてあったのだから

・きつねの名前の「のはらこんきち」って書いてあった

・「のはら・こ・ん・き・ち」って書いてあった

・えっちゃんの名前ではなかつたんだ
T12. じゃあ、読んでみて(えっちゃんときつねのセリフを音読させる)

T13. 「本当にそう見えます」どう見えたの？

・のはらこんきちって見えた。本当にそう書いてあるから

・きつねの名前に見えた
T14. 「ほんとうにそう見えます」の文を考えて見るよ。どういふことなんだろう？ ちよつと相談してみ

・本当にえっちゃんはそう思った
・ぼやつと見えたってことかもしれない
・えー信じられないって感じ、だつてずっと追っかけてきているから、自分のだと思っっていたし

・もしも他の人が見たら違って見えるのかもってこと
じゃない

・もしかしたらきつねのかなつて思っ
た

・自信を持つたけど……違っかもしれないな
あつて自信がなくなつたって感じ

* ここで、チャイムが鳴る

T15. 自信持っていたけど、違っかも思っただよ
ね。へんだと思ったえっちゃんは、どうしようとし
た？

・名前を確かめようとした、もう一度確かめよう
とした

T 16 確かめることができたのかな？

- ・ 確かめようとしたから、まだ確かめていない
- ・ 風が吹いてきて帽子がさらわれたから、確かめられなかった

*音読をして、本時の感想を書かせる

学習会話されたこと

子どもたちの感想は「きつねの帽子である」「えっちゃんの帽子である」が見事に2つに別れていた。「ここでは「この帽子がえっちゃんのものである」ということは分からないので、きつねの帽子と考えてもいいし、えっちゃんの帽子と考えてもいいのである。大事なのは、えっちゃんは絶対に自分のだと思っているし、大切な帽子だからどうしても取り戻したいという気持ちがあると言うこと。

低学年では、もつともつと子どもたちに音読させて、会話文の表現読みから、気持ちを考えさせていくこともかなり有効な手段であると指摘された。

この場面ではあまり意見がでなかったのだが、やま場の部分の授業はどのようになつたのかという質問がでた。私の授業では、「私は帰らないわ。」「きりりと見上げて」「湯気がもうもう」などの表現から「怖いけど自分にとって大切なものを取り戻したいえっちゃんの気持ちをみんな確かめた。

話し合いでは、命令文について意見が出された。命令文は「食べなさい」「返しなさい」といくら丁寧な言い方をしても年上の

人には使えない。さらに人の意志にかなわない行為に対する命令は強い感情が含まれていると教えてもらった。それだけえっちゃんの怒りが大きいということだが、それが2年生の子どもと授業する場合はどうするのかは話し合いにならずに、私がまた授業をするときの課題となった。

どの言葉にこだわって、その言葉からどんなイメージを膨らませて、そのためにどのように発問していけばいいのか……。何度 授業しても 何度 レポートを書いてでも難しいなと思知らされる。

子どもたちの感想

ぼうしがいっぱいあるからびっくりした。きつねが日本ごでしゃべっていたからおどろいた。ぼうしの色も同じだからびっくりした。(混仁)
もしかしたら、きつねのぼうしとえっちゃんのぼうしがいつしよだったのかなと思いました。きつねは何でぼうしをぬぐるとき、いやそうだったのかなと思いました。(隆峨)

えっちゃんのぼうしだと思います。(志有)
えっちゃんのぼうしだと思います。なぜかというところとおいかけて見ていたから。(倫)
えっちゃんのぼうしはどこに行ったのかしらたい。わたしはまだ野原にあると思う。(優衣)
えっちゃんが野原に行つて、えっちゃんのぼうしがきつねの頭にのつかっていたのが、きつねの名前だったのがふしぎに思いました。(優希)

ふしぎな言い合いです。きつときつねのぼうしだと思います。(渉)

きつねのぼうしと同じようなぼうしだったのがすごかったです。けつきよく、ぼうしが自分のはなかったのがざんねんです。(寧々)

何できつねはめんどくさそうにぼうしを見せたのかな。何で風はぼうしをさらったのかな。ぼうしはえっちゃんのぼうしだと思います。(沙優)

何でぼうしがにているのに、名前がちがうんだらう。(舜)

きつねのぼうし、近くで見せたのかな？(空平)

えっちゃんのぼうしだったはずなのに、どうしてのはらこんきちのぼうしにかわつちやつたんだらう。つぎのお話が楽しみです。(成珠)

きつねは同じぼうしをもっていたのかな。えっちゃんはどうしてしんじれなかったのかな。えっちゃんはいしんをもっていてすごいな。えっちゃんのぼうしじゃなかったら、えっちゃんのぼうしはどこに行ったのかな。きつねはどうして見せるのがいやだったのかな。(桃果)

えっちゃんときつねのぼうしは名前がちがうだけで同じぼうしだったのがふしぎ。(玲奈)
えっちゃんのぼうしじゃなかったら、どこにいったんだらう。(志竜)

ぼうしがかわることがわかりました。(一誠)
(仙台・七北田小学校)